●──北米

「場」の多様性を深く考える

油井大三郎（ゆい・だいざぶろう）
東京女子大学現代教養学部国際社会学科

地域研究者の軌跡

①生年・出身地……一九四五年、東京都

②専門分野・地域……米国研究

③学歴……東京大学教養学部教養学科国際関係論分科、同大学院社会学研究科国際関係論専門課程修士課程修了、同博士課程単位取得中退、一橋大学大学院社会学研究科博士号取得

④職歴……明治大学専任講師（二八歳、五年間）、同助教授（三三歳、一年間）、一橋大学助教授（三四歳、八年間）、同教授（四二歳、九年間）、東京大学教授（五〇歳、一〇年間）、東京女子大学（六〇歳、五年間）

⑤現地滞在経験……米国（三九歳、二年間、客員研究員）、米国（四九歳、半年、客員研究員）

⑥研究手法……米国西海岸、とくにサンフランシスコ湾岸地域、アジア系移民史と地域史の交錯を文書資料だけでなく、オーラル資料、地理情報からも研究

⑦所属学会……アメリカ学会、アメリカ史学会、国際政治学会、歴史学研究会、同時代史学会、移民学会

⑧研究上の画期……ベトナム戦争、米国を研究する原点

⑨推薦図書……江口朴郎『帝国主義と民族』（東京大学出版会、一九五四年）、斉藤真『アメリカとは何か』（平凡社、一九九五年）

メッセージ

学部学生時代に所属していた学科が国際関係論と地域研究を一体化した性格の学科であったため、よく「国際関係論とは何か、地域研究とは何か」を議論してきた。ただ指導教員の専門領域が現代史研究であった影響で、どちらかというと

歴史学の方法を中心に考え、自分の専門分野は現代国際関係史であると考えていたと思う。一九八〇年代半ばに米国に二年間在外研究で滞在し、日本の占領改革の研究をした折、文化の違いを痛感し、国民文化や記憶形成の差に関心をもち始めた。さらに一九九〇年代半ばにはサンフランシスコ湾岸地域のアジア系移民史を研究し始め、小地域のフィールドワークの面白さを痛感した。また、二〇〇五年に日本学術会議に新設された地域研究委員会に関わるなかで、エリア・スタディーズと地理学、人類学との統合などを考えるようになり、空間科学としての地域研究の意味を考え始めている。

地域研究の方法論をめぐる若い研究者の座談会を拝見し、研究者としてのアイデンティティの模索が新しい研究創造の原点となるので、その悩みは建設的なものと感じた。ただし、「地域研究とは何か」という問いは堂どうめぐりをしている感がある。それは、地域研究者は対象地域が「好き」だから研究している面があり、その対象地域の「個性的理解」に満足している面が強いと感じる。他の諸科学の場合は、いろいろな時代の人類が直面していた諸課題の解決に肉薄する形で学問形成をしてきた。たとえば、政治学は絶対王政を打倒して市民社会を建設することに貢献したように。ところが、学問が制度化し、学部や学科としての存在意義を主張するようになると、方法自体の独自性を強調して生き残りを図る傾向になると思う。「地域研究とは何か」という議論も同様の傾向にある印象が強い。つまり、大学人としての「職業病的発想」から脱却して、地球環境の危機とか、地域紛争の多発とか、グローバル化による格差社会の拡大とか、今の人類が直面している困難に地域研究がどう役立つのかを考える方がかえって独自性が明確になる早道ではないだろうか。

地域研究の魅力の第一は、「他者の深い理解を通じて自己の相対化」を図れることにあると思う。その際、設定する他者が国家単位であったり、国家より広領域であったり、村落などの小領域だったりするが、それを同じ「地域」として一体化する前に「地域」設定の差の意味をもっと深めるべきと考える。地域研究は、政治学や経済学などと異なり、「場」にこだわる学であるのだから、「場」の多様性を学問的に深く考えるべきと思う。第二に、「場」に関連して、地域研究は文理融合ないし文理協働的に発展する可能性のある分野としての魅力があると考える。「場」を考えるときに、地形・地質・緯度・経度・気候などの自然条件は無視できない。近代の学問が文理分離し、文系の学問もディシプリンごとに壁を作ってきたなかで、現在の世界が抱える諸困難はこの「壁」を打破して、再統合しなければ解決がつかない状況にあることをまず認識すべきと思う。地域研究は、「個別性」に甘んじず、現代世界の諸課題に果敢に挑戦してゆけば、結果的に新たな「普遍性」を獲得できる学問だと信じている。是非、若い地域研究者の方にはそうした知的挑戦に挑んでいただきたい。